

「このひらの向こうに」

アトリエ カルヴァドス 制作

大宗せいる 著

キドロア帝国の中西部に、三つの領国にまたがる森がある。北のガイゼル、南のハルヴァリ、そして西のブレエム、それらを隔てる国境という見えない壁は、広大な広葉樹林に突きあたったところでその意味を失う。

繁栄を極めるキドロア帝国にあつて、ここは未だその力の及ばぬ、文字どおりの秘境であつた。凶暴な飛竜の産卵地であるとも、森の女神の聖域であるとも言われ、人は決して近づこうとしない。そしてそれこそが彼、サマエルがここに暮らしている理由だつた。

頭上を覆う緑の天井には、ところどころにぽっかりと大穴が開いている。森の西端近くに位置するそんな森の切れ目の一つに、サマエルと仲間達は住んでいた。彼と双子の弟を入れてもたった七人しかいない、小さく閉ざされた里だつた。



太い幹の間を縫う小道はその日、いつにもまして賑やかだつた。猿やら栗鼠

やら鹿やらが、次から次へと現れる。穏やかな春の訪れに、彼らも心躍らせているのだろうか。

若葉を透過した陽光が、あたりを柔らかく染めている。適度に湿ったそよ風も、なんとも言えず心地よい。ただ、充滿している木々の息吹きが、彼には少々濃密すぎた。

先刻、仲間達との昼食をいつも通りにすませたところで、サマエルとリハエルは家を出た。森の近くに位置する人里、ゲルンヴェルツに向かうためだった。

二人の肩からはそれぞれ、ばんばんに膨れ上がった皮袋がぶら下がっている。中身は里の知恵袋、ガゼスの手による革細工だ。加えて皆の世話役ともいえるカヴァリラが染め、仕立てた鮮やかな緑の服と、おまけにつける鈴蘭の切り花も入っている。どれもとびきり素晴らしい品だから、きつと交渉もすんなり進むことだろう。

無数の泉や湿地、草原を内包する大森林は、四季折々の豊かな恵みを与えてくれる。だが、閉ざされた空間であるが故、嗜好品や工芸品はどうしても外部に頼らざるを得ない。近くの村々へ物々交換に赴くのは、彼ら兄弟に割り当てられた仕事だった。

春告げ鳥たちのやり取りに、いやがうえにも心が踊る。と、そこで弟が口を開いた。

「鼻歌かよ。ずいぶんと楽しそうじゃねえか」

なにやら不満げな金の瞳が、木漏れ日を浴びてきらりと輝く。

「別にいいだろ。そんなの俺の勝手じゃないか」

「分かんないねえ。こんな子どもの使いみたいなことさせられてよ、いい加

減うんざりしてこねえのか？」

「子どもの使い、か。ま、実際そうなんだから仕方ないだろ」

「冗談じゃねえ！」

歩みを止めぬままの返答を、リハエルは顔を背けて打ち消した。

実際のところあどけなさを残すその表情も、しなやかではあるもののまだ線が細い身体つきも決して成熟した、大人のものとは言いがたい。それは双子の兄である己にも、そのまま当てはまることだった。

「俺達いったいいくつだよ」まったく、よく我慢できるよな」

「歳で比べたらなおのことだろ。みんな、俺達なんかよりずっと年上なんだから。こつちで生まれたヴェゼーラは、まあ違うけどさ」

それが事実なのだから、恥じる必要はないはずだ。が、皆の子ども扱いが、弟はどうにも我慢ならぬらしい。

そういう感情がないと言ったら、確かに嘘になるだろう。しかし、それはそれとして、サマエルはこの仕事が好きだった。

「帰りが遅くなっちゃう。ごちゃごちゃ言っでないで急ごうぜ」

ほどなくすると、彼方に森の終わりが見えてきた。巨木の壁の向こうでは、緑の絨毯がきらきら光り輝いている。そのきらめきを瞳に映し、彼はさらに歩みを速めた。

「どうだい、このベルト？　こんないい品、街に出たってきつと手に入りやしな」

ほどなくゲルンヴェルツに到着した兄弟は、いつもの通り順番に家々を回っ

ていった。革細工と引き換えに入手した、目当ての品々を次々と袋に詰めこむ。酒や裁縫用の生地や糸、それに小麦粉やなにより大切な塩。品物が良かったのは勿論のこと、花のおまけも効いたのだろう。交渉は思った通りに順調で、袋はたちまちのうちに重みを増した。

「ああー、気分いいなあ」

力いっぱい伸びをする、サマエルの足取りは軽快だった。

「そうかいそうかい。そりゃ良ござんしたね。まったく見かけ通りにガキなんだからよ」

そんな弟の毒づきも、彼の耳には届いていない。役目を無事に果たせた安堵も、勿論あるにはあるだろう。が、久しぶりに味わう開放感が、なにより彼を浮かれさせていた。

寒村を囲む平原を鮮やかな緑が埋めつくし、その彼方には大陸を縦断する大断層が青く霞んでそびえている。巨木に囲まれた里からでは、決して見られぬ光景だ。それらの向こうに果てしない大地が繋がっていることを、広い世界の片隅で自分が生きていることを、彼は改めて実感していた。

「よお、サマエル。久しぶりだな」

芋の植えつけをしていた男が、こちらに気づいて手を挙げる。

「久しぶり。元気そうだね、おじさん」

「相変わらず、全然成長してねえなあ。お前ら、ちゃんと飯食ってるのか？」

「またそれかよ。こう見えてもちよつとずつ、しっかり育ってるんだって」

最後に訪ねた白髪の老婆はその皺だらけの顔をくしゃくしゃに、腕を広げて迎えてくれた。

「待ってたよ、サマエルちゃん、リハエルちゃん。ほら、いつものようにちょっと寄り道して行き」

「いいの？　じゃあ、お言葉に甘えようかな。婆ちゃんの紅茶、楽しみにしてたんだ」

数年前に初めて出かけてきた時は、こうした会話さえ苦痛に感じた。森に住み着いたよそ者に彼らは警戒感を隠さなかったし、こちらはこちらで嫌悪を抑えきれずにいた。だが、里長のレトは、そんな自分達にこの役割を命じつづけた。

時を経た今、村人たちとの交流は大切な生活の彩りとなっている。閉塞した環境に暮らしている身にとって、それは外の世界への微かな、しかし確かな接点といえた。たとえ無駄話であったとしても、鬱々とした気分をずいぶん楽にしてくれる。彼らに対する恐怖や怒りも、今ではかなり薄れてきていた。

「最近、なんだか物騒でねえ。途中で危ない目にあったりしなかったかい？」

「いや、別になにも。……なんか事件でもあったの？」

「ちよつと前から羊が何頭も襲われたり、村の柵が壊されたりしてたんだよ。それがほら、シュタインさんは知ってるだろ？」

「牧場主の？」

「そうそう。この間、あそこのシェリルちゃんが急にいなくなっちゃってねえ。そりゃあ、村中大騒ぎさ。総出で探し回りはしたけれど、結局見つかってないんだよ」

「ふうん。大変だったんだなあ」

入れたての紅茶を味わいながら、サマエルはそつと視線を滑らせる。と、弟

の口元に、自信満々の笑みが浮かんだ。

「なんなら俺達が探してやろうか？」

「莫迦をお言い！ あんた達は子どもじゃないか。そういうのは一端の大人が言うことだよ」

「……！ 俺は子どもじゃない！」

赤くした顔をぶいと背けた、リハエルの気持ちはよく分かる。確かに自分達ならシェリルを見つけ、さらった犯人を突き止められるかもしれない。だが、この人の良い老婆はなにも知らないのだ。彼のかんにはさわったようだが、本気の怒声がありがたかった。

それにしても、である。

とびきりの人嫌いだった彼でさえ、最近では本音を表情に浮かべてみせる。そして今にして思えば、これこそがレトの真意だったのかもしれない。紅茶の芳香に包まれながら、彼はそんなことを考えていた。

「本当に大丈夫なのかい？ 遠慮なんかしないで、泊まっていつでもいいんだよ」

「心配いらないうって言うてるだろ。じゃ、暫くしたらまたくるからさ」

老婆の家を二人が出たのは、大断層の上空が夕陽に染まりはじめる頃だった。ほんの少しばかりのつもりだったが、居心地の良さに長居をしすぎてしまったようだ。

「でもねえ。これじゃ、里に着く前にすっかり日が暮れちゃうじゃないか」

「しつこいんだって。そんなこっちゃ短い寿命がますます縮むぜ」

にやつく弟を肘でたしなめ、不安げな老婆に微笑みかえす。満足と名残惜し

さを感じつつ、サマエルは森への道に戻りはじめた。

彼女の誘いに、正直心が大きく揺らいだ。が、そういうわけにもいかないだろう。すっかり遅れてしまった帰着を、きつと仲間達が待っている。

手を振る老婆の姿がやがて家々の影に消えてしまうと、間もなく廃材で造られた村の門が見えてくる。と、そこでサマエルの足が止まった。

「……ん？」

見開かれた彼の眼に道から一段高くなった、小さな畑が映りこむ。その段差を固める石垣に、粗末な服をまとった娘がぽつんと腰をかけていた。束ねられた金髪をきらめかせ、肌を鮮やかな茜に染めて。

綺麗だと、純粹にそう感じた。

生いしげる木々の葉や咲きほこる花々、それにたわわに実る自然の恵み。清らかな泉に映った青空と、そこを飛びかう鳥や虫たち。大森林には四季折々の、様々な色彩が満ちあふれている。しかし、これほど繊細で美麗なそれを、眼にしたことがあっただろうか。

——どこの娘だ？

なにしろ小さな村である。付き合いのあるなしは別として、大概の住人は見知っているつもりだった。最近になって、どこからか越してでもきたのだろうか。見れば未だ新しさを残した野良着も、半袖から突きでた腕の細さも、さらには髪の毛束ね方一つまでもがどうにもしっくりきていない。きちんと合わせられた膝にしろ、そこで行儀良く揃えられた指にしろ、雰囲気か村の腕白どもとあまりに違いすぎていた。

「おい、兄貴！ なに、ぼうつとしてんだよ」 苛だたしげな弟が、つかんだ

肘をむりやり引つ張る。が、たまらず大きくよろめきつつも、サマエルは瞳を逸らそうとしなかった。

「悪い。ちよつと先に行つてくれよ」

「先にい？　なんで？」

夕陽に照らされた横顔は、言いようもなく寂しげだった。ときおり瞼が下げられるたび、きらめく雫がすつと流れる。柔らかそうな指がそれを拭いとる様を、サマエルはぼんやりと見やりつづけた。

「ははあん。あの女が気に入ったって、そういうわけかい」

「……」

「よしとけつて。どうせ叶わぬ恋なんだからよ。なにしろ俺達は——」

「うるせえな！　先に行けつたら、さっさと行けよ！」

「え？　わ、わあつ！」

敢えて見当違いの方向に投げ飛ばした袋を、弟は懸命の疾走で抱き止める。

「あ、危ねええ……。つたく、このばか野郎が！　酒の壺が割れちまうだろ！」

「はは、そいつの方は頼んだぜ。一人でも大丈夫だと思うけど、念のために油断はするなよ」

「こ、子ども扱いするんじゃないわねえ。なんだよ、てめえの方がよっぽどガキのくせしやがつて」

不満の叫びが終わらぬうちに、サマエルは軽くなった身体を回す。そしてこみ上げる笑いを堪えつつ、早足で少女の元に向かっていった。

「好きなのか？　夕焼け」

明るく飾った呼びかけに、娘の背中がびくりと震える。だが、それが唯一の

反応だった。まるで何事もなかったかのように、彼女は沈みゆく夕陽を見つめつづける。

「俺はサマエル。森に住んでる変わり者がいるって、村の奴らから聞いてないかい？」

今度もやはり答えはなかった。ただ、背中に垂れた金髪が、風に揺れるのみである。なんとも気まずい雰囲気、二人の間に漂った。明らかに無視を決めこまれている。だが、それが分かっているなお、サマエルの足は動かなかった。あの横顔の残像が、彼を執着させていた。

「ふうん。よっぽどお気に入りみたいだな。けど、いい加減に飽きてこないか？ま、確かに綺麗だとは思うけど」

途端、驚くほどの俊敏さで娘の首が振り向けられた。

「そ、それじゃずっと——」

充血した眼に睨まれて、思わず二、三步後ずさる。と、彼女ははっと息を呑み、頬をたちまち真っ赤に染めた。

「夕焼けなんて……、好きじゃない」

か細い声を震わせて、娘は石垣を飛び降りた。危なっかしい身体の運びに、支えてやろうと慌てて駆けよる。

「来ないで！」

一瞬ふらついた身体を彼女はなんとか立て直し、そして脱兎の如くに駆け去った。長い影とともに小さくなっていく後ろ姿を、サマエルはただ呆然と見送った。

「さすがは兄貴。ふられっぷりも見事なもんだ」

森の入口まで戻ってみると、そこで弟が待っていた。ちくちくした笑いを浴びて、自然と口がへの字に曲がる。

「さ、先に戻れって言っただろ。なんだよ、盗み見なんかしやがって」

「せっかく待っててやったってのに、ひでえ言い方しやがるもんだ。だいたいよ、そいつは兄貴だって一緒だろうが」

「ば、ばか言えよ。俺がいつそんなこと」

「へええ。さっきのが違うってんなら、他の呼び方を教えてほしいね」

皮袋を投げ返し、リハエルはさっさと踵を返してしまう。どうやら本気で、しかも相当に苛だっているらしかった。

「お、おい、ちょっと待てたら」

追いかけながらの呼びかけに、しかしリハエルは振りかえらない。彼はますますその歩を速め、黙々と里を目指すのみだった。

紅の陽はやがて木々の間に姿を消し去り、くねくねと続く小道に闇の時がやってきた。

とつぷりと日が暮れてなお、広大な森林は生の活気に満ちていた。狼やふくろうが己の存在を誇示するなか、あちこちからかすかな葉音が聞こえてくる。ふと視線を回してみれば、ただよい流れる靄の向こうで二つの珠が緑に光った。きちんと行儀良く並んだそれは、豹か山猫の瞳だろうか。試しにぐっと睨んでみると、たちまち草を鳴らしてどこかへ消えた。

「なあ、兄貴」

リハエルが口を開いたのは、里への道ももう半ばを過ぎてからのことだった。

月明かりに浮かぶその表情は硬く、まるで凍ったかのように動かない。

「あの頃のこと、忘れたわけじゃねえんだろ？」

「……ああ、当たり前だろ」

まったく酷い毎日だった。右を向いても左を向いても、あるのは分厚い石壁だけ。あの狭い空間には、窓はおろか寝台も机も、なにより便所すらもなかった。

興味と嫌悪に満ちた視線にさらされ、とても料理とは言えぬ食事を食べる。すえた臭いが漂う地下室での暮らしは、まさに囚われた獣同然だった。今でも悪夢に飛び起きて、そのまま寝つかれぬ時がある。

「そうかい。なら、なんであんな娘に入れこんでんだよ？」

「え？ お、俺は別に……。ちよつと気になっただけだつて」

「同じことだろ。言葉遊びしてねえで、ちゃんと質問に答えろよ」

「……」

「まさか、彼女だけは違うとかほざくつもりじゃねえんだろうな？」

凶星だった。どうせ思いこみだと諦めつつも、自分は心のどこかで期待している。そうさせているのは、あの寂しげな横顔だった。走り去っていく後ろ姿に、心の石壁を感じたからだ。

「よしとけよ。いつか向こうに戻れば、女なんていくらでも寄ってくるって。

なにしろ、この俺様と同じ顔してるんだからな」

「はいはい、そうでしょうとも。ほんと良かったぜ、そういうとこまで一緒にやなくてさ」

「な、なんだとお？ せつかく気い使ってやってるのに」

本当にそんな時が来るのだろうか。あの懐かしい故郷に、戻れる手段などあるのだろうか？ 詰めよってくる弟に口笛で応えてみせながら、サマエルはそう己に問いかけていた。

ガゼスが日々、探求を続けているのは知っている。そして、それが次第に行きづまりつつあることも。

——無理だな、たぶん。

なにしろ、馬車や船では行けない場所だ。だが、これから死ぬまでの長い間を、あの深い森のなかですつとこそ生きていくのか。そう考えると、時々無性に怖くなる。

あの地下室と比べれば、里は理想郷とすら言えるだろう。森の恵みは実に豊かで、少ないながらも共に暮らす仲間がいる。だが、それでも、どうしても心の乾きを抑えられない。

里を囲む巨大な木々は、あの冷たい石組みのように自由を奪いなどしない。だが、彼にはそれが心にそびえるもう一つの壁に、恐ろしいほど高く信じられぬほど厚い、越えるに越えられぬ壁に思えた。

「いい機会だから言っとくけど、奴らを信用しすぎじゃねえのか？ あいつらだって、一皮むけばみんな同じさ。あの娘もばばあも、最後は敵になるんだよ」「……そうか？ そういうお前だって、ずいぶん気を許してるように見えるけど？」

「おい……。ふざけたこと言うんじゃないぞ」

一段下げられた声色と共に、弟の掌が肩をつかんだ。力のこもった指先が、サマエルを半ば無理矢理に立ち止まらせる。

「奴らと慣れあおうなんて、俺はこれっぽっちも思ってたねえよ。自分のために、せいぜい利用させてもらってるんだ」

蒼い月に照らされた、リハエルの頬はみるみる赤く染まっていった。忙しい瞬きの向こうで、瞳がきらりと緑に輝く。

なるほど、彼自身もどうやら自覚はしているらしい。そのうえでなおも己を律するべく、必死になっているのだろう。

「分かった分かった。俺が悪かったよ」

暫しの睨みあいの中、サマエルは弟に頭を下げた。他意のあるなしに関わらず、無神経なことを言ったと思う。だが、それはそれとして、やられっぱなしも癪だった。

「ま、お前にはヴェゼーラがいるもんな。あいつらなんてどうでもいいか」

そう言い終わらぬうちに、ぴんとリハエルの背筋が伸びた。誰もいるはずのない暗闇を、動揺も露にきよろきよろ見回す。

「ど、どういう意味だよ。あんな小娘なんか、俺はなんとも……」

「嘘つけよ。お前、いっつもあいつのこと眺めてるじゃんか。だらしなく口を半開きにしちゃってさ」

「う、う、うるさい！」

「なあ？ あいつの親父……、エルモッドはこっち側の人間なんだぜ。つまり、ヴェゼーラにだって奴らと同じ血が流れてるんだ」

「そ、それは生まれの問題だけだ。ヴェゼーラは、あいつは違う！」

「ああ、俺だってそう思うさ。だから、な？ こっちの気持ちも分かってくれ

「お」

笑いまじりに言い残し、サマエルは止めていた足を再び踏みだす。

「くそっ！ 卑怯なやり方しやがって」

小走りに追いついてきた弟は、それきり何も言わなくなった。拍子の揃った靴音だけが、二人の間を歩き来する。

やがて、木々の向こうからいくつかの灯火が見えてきた。それは次第に大きくなって、段々と窓の形になっていく。その一つに浮き上がったお下げ髪の影響が、こちらを指さして明るく叫んだ。

「父さん、母さん！ ほら、リハエルやっと帰ってきたよ」

「はは、俺のことなんて眼中になしじゃんか。おめでどう、弟よ。どうやら脈ありみたいだぞ？」

そんな大げさな抑揚に、リハエルは脇腹への拳で応えた。冗談ではすまぬ激痛に、たまらずへなへなとしやがみ込む。

「……う！ ぐ」

「ざまあみやがれ、くそ兄貴！ 人を小馬鹿にしやがって！」

「ちくしょう。少しは手加減してくれよ」

笑いまじりに呻きつつ、駆け去る弟を睨めつける。その向こうには粗末な作りの家屋が五棟、寄りそうように軒を連ねあっていた。それがサマエル達の里。平和な暮らしが約束された、心の壁の内側だった。



大森林の周辺は、翌日も春らしい穏やかさに恵まれた。一日の終わりが近づ

くにつれ、次第に風が強まったことを除けば、だが。

今日の夕映えは、それは見事な黄金色だ。雲も木々も家々も、そして遙かにそびえる大断層も、すべてがいつもとは違って見える。

サマエルは、今日もゲルンヴェルツへとやって来ていた。だが、その隣に弟、リハエルの姿はない。何度となく足を運んだ村ではあるが、独りきりというのは初めてだった。

入手し忘れた品があったわけも、別の仕事があったわけでもない。いつもなら弟やヴェゼーラと過ごす、寸暇を潰した理由はすべて彼自身の心にあった。あの寂しく哀しげな表情が、臉に焼きついて離れない。もしも出来ることならば一度ゆっくり話してみたいと、寝不足の頭でそう思った。

——まったく参っちゃうよな。こういう日に限って仕事が山盛りなんだから。大きなため息をつきながら、歪み傾いた門をくぐる。さて、どこから探したものだろう。日が暮れてしまうまで、もうさほどの時間は残っていない。が、その結論が出るより早く、はたと彼の歩みは止まった。

——あ、あいつだ。

畑を囲んだ石垣から、二本の影が伸びている。その片方の先に、お目当ての彼女がいた。昨日と同じ場所に同じ服装で座り、昨日と同じように沈み行く夕陽を見つめている。違っているのは、傍らに一回り大きな背中が寄りそっていることだった。

考えるまでもなく、それが誰なのかは明らかだった。歳こそかなり上のようにだが、髪や瞳の特徴は彼女のものと同じ。なによりも、顔立ちそのものがそっくりだった。

「よお。今日はお袋さんと一緒かい？」

背後からの呼びかけに、娘の首が静かに回る。だが、そこから先の展開は、まるで昨日の再現だった。

「あ、おい！ ちょっと待ってっ！」

声の限りに叫んでも、駆け去る彼女は応えてくれない。

「……傷つくよなあ。俺のこと、そんなに気に食わないのかよ」

「いいえ。きつと違うと思います」

不意に否定を返されて、思わず身体を向きなおらせる。と、強まりつつある夕吹に美しい金髪が揺れていた。丁寧な一礼を送ってみせた、その口元に優しく落ちついた微笑が宿る。

「はじめまして、私はルリア。あの子の母です」

はるか年下に見えるであろうに、彼女は敬語口調を崩さなかった。慣れというのは恐ろしい。そんな一人前の扱いを、どうにもこそばゆく感じてしまう。

「お、俺はサマエルっていうんだ。どうぞよろしく」

「ああ、あなたが！」

ぱつと輝いた表情の前で、白い掌が打ち合わされる。

「噂は常々伺ってます。あの美しい木々に囲まれて暮らせるなんて、想像するだけでも素敵ですわね」

「……はは、外から見ればそうなのかもね」

「と、いうと？ 実際のところは違うのですか？」

「まあ、俺のことなんかどうでもいいさ。それよりも、今はティアナの話を聞かせてくれよ」

苦笑を浮かべて促すと、ルリアの顔に陰りがさした。水色の澄んだ瞳が、ゆつくりとぎこちなく逸らされる。

「あなたにだけではないんです。あの子、誰にでもあんな調子で。ごめんなきいね、後でよく言い聞かせておきますから」

「誰にでも？」

「ええ。信じていただけないかもしれませんが、以前はとてもよく笑う人懐っこい子でしたのよ。あの日、あんなことになるまでは……」

細切れに語られた顛末を頭のなかで組み合わせると、どうやらこういうことらしい。

彼女の夫、すなわちティアナの父であるレーゼルは、そこそこの名知れた商人だった。ブレエムの都を拠点とし、塩や香辛料を手広く扱っていたという。亡き父から引き継ぎ義弟ラウマンと育てた人脈は太くそして堅固なもので、店は幅広い層に多くの得意先を持っていた。

賑やかで、活気に満ちた毎日だった。夫の商売はまさに順風満帆で、ティアナも日々、明るく伸び伸びと成長していく。ところが、半年ほど前に、そんな幸福はあっけなく終わりを告げた。

「夫が突然倒れたんです」

レーゼルの襲ったのは、激しい嘔吐と下痢だった。施術師は強度の食あたりと診断し、当人も周囲もそれを信じこんでいた。だが、わずか数日間後に、彼は高熱のなかでこの世を去った。

「義弟の呼びだしを受けたのは、葬儀を終えた夕刻でした」

哀しみにくれる彼女がそこでラウマンから聞かされたのは、まったく思いも



——いくらなんでも疑り深い、か。

これも、密室で暮らした日々の後遺症なのだろうか。もしもリハエルだったとしたら、はたして何と言うだろう？　だが、この話の主演は、彼ではなくて別にいる。

「で、それが人嫌いの理由なのかい？　ティアナの、さ」

「はい、それもあると思います。あの子、義弟にとっても懐いていましたし。きっと辛かったでしょうが、でもその時はまだティアナはティアナのままでした。うなだれる私を、必死に元気づけてくれましたから」

「それだけじゃないってわけ？　他にもなにかあったのかい？」

「ええ……」

ルリアが挟んだため息は、細くそして哀しげだった。

健気に平静を装うティアナが、たった一つだけ彼女にねだったことがある。

旅立つ前に街を廻って、友人たちに別れの挨拶をしたいというのだ。

せめて、それくらいは望むとおりにしてやりたい。ルリアは無論、一も二もなく頷いた。

「でも、ね」

その後に続く展開は、おおよそのところ予想がついた。

「みんな、まともに会おうとはしてくれなかつたんです。体よく門前払いされてしまうか、出てきてくれても態度が妙によそよそしくて」

説明されるまでもなく、それは噂のせいだろう。おそらくふんだんな尾ひれをつけて、広まっていたに違いない。

「仕方ないよね。私だって、病気になんかたりたくないもの」

夕暮れの街をとぼとぼと引き返しつつ、それでもティアナは微笑もうとしていた。行く手に伸びる己の影を、ただじっと見つめつづけて。

「だけど……。やっぱりちよつとさびしいな」

それを崩さぬままの震える声に、彼女はかける言葉が見つからなかった。

「それからなんです。あの子が人嫌いになったのは」

歳をそこそこ重ねてしまえば、それはなんとか諦められる。娘が駆け去った砂利道にその物憂げな瞳を向けて、ルリアはぼつと呟いた。

人の態度や行動は、道理や感情だけで決まりはしない。どれほど親密な関係とて場合によつてはいとも簡単に壊れるものだし、逆もまた然りなのだ。

生きてきた時間が長い分、それだけ多くの人間と関わってきた分、自分は割り切る処世術を知っている。諦めて身を守る術を、体験によって身につけている。だが、そんな防衛手段を持たないティアナには、殻に閉じこもることが唯一の逃げ道だった。

「うん……。俺にも分かる気がするよ。付き合い自体をもたなけりゃ裏切られることも、それを怖がる必要もないもんね」

「ええ。きつと、あの子にはまだ少し早すぎたんです。時間はかかるかもしれませんが、でもいつかは気づいてくれるでしょう。そうしていても、何も変わりはないのだと」

はるかな絶壁に夕陽が吸いこまれていく様を、二人は肩を並べて眺めつづけた。茜の天空を背景に、小鳥の群れが家路を急ぐ。陽光の恵みを失って、風が次第に冷たくなった。

「それにしても不思議だわ」

そんな呟きで我に返ると、ルリアの笑みがまっすぐこちらに向けられていた。間近からまじまじと見つめられ、なかば反射的に身体が仰げぞる。

「不思議って？ なにがさ？」

「言葉づかいや表情が、とても大人びて感じるんです。見たところ、あの子と同じ年頃なのに」

「そ、そうかな？」

髪をなびかせての頷きに、サマエルは苦笑を浮かべるのみだった。そういう印象を持たれても、ある意味当然なのである。

自分やりハエルの年齢は、彼女とさして変わらぬはずだ。いや、もしも正確に比べたならば、おそらくこちらが上だろう。外に出る時の言動は極力見かけに合わせているが、どうも人ごととは思えずにのめり込みすぎてしまったようだ。

壁の向こうに住んでいながら、孤独の殻に閉じこもっている。そんなティアナにますます惹かれつつあることを、彼ははっきりと自覚していた。



翌日は昼過ぎから曇りとなって、ほどなく雨が降りだした。出かけていきいのはやまやまだだったが、強まる一方の降りを見てやむなく諦めることにする。畑仕事も休みとなって、手持ちぶさたな午後だった。

「ブレエムの街に？ いつ？」

「まだ、はっきりとは決まってないの。でも、近いうちにガゼスが連れていっ

てくれるって。今は色々忙しいから、たぶん夏になる頃かなあ」

そんなリハエルとヴェゼーラの会話をよそに、ぼんやりと窓の外を眺めつづける。靄に包まれた大森林に、鳥や動物達の姿は見えない。静まりかえったその光景は、まるで絵画のようだった。

「リハエルたちも一緒に行かない？ きつと、楽しいと思うんだけど」

「行く行く！ 勿論、行くに決まってるだろ。なあ、兄貴？」

「ああ、そうだな」

まったくいい気なものである。「敵」がうじゃうじゃいる場所に、よくも出かけようという気になるものだ。まあ、ヴェゼーラさえ一緒にいれば、どうでもいいのかもしれないが。

——ブレエム、ね。

ティアナも誘ってみようかと、ふとそんな考えが頭を過ぎった。が、わざわざ検討しなくとも、断られるのは目に見えている。ろくに話したことすらないので、きつと夕焼けと同じくらいに大嫌いな街だろうから。

——そう、なのかよ？ 本当に嫌いなのかよ？

ならば、どうして毎日あそこにいるのだ？ どうしてあんなに哀しげなのだ？

やはり彼女と話してみたい。今さらながらそう思う。雨滴の軌跡を眺めつつ、サマエルは天候の回復を空に願った。

雨は翌日も降りつづき、夜遅くになってようやくやく止んだ。やがて待ちに待った太陽が、澄みきった空を駆けあがる。

「さあ、さっさと仕事をやっつけちゃおうぜ」

朝食をとるのもそこそこに、サマエルは表へと飛びだした。水汲みに薪集め、それが終われば畑の手入れと、するべきことは山ほどあった。が、弟の尻を叩きつつ懸命にこなし続けた甲斐あって、いつもとさして変わらぬ時間にそれらはすべて片づいた。

「ちよつと散歩でもしてくるわ」

着替えながらの一言に、ふんとリハエルは鼻を鳴らした。

「そりやまた随分と優雅だねえ。どうせゲルンヴェルツに、だろ？」

「だったらなんだよ？ 悪いのか？」

「別にい。もう、好きにすりゃいいんじゃないかねえの？ 俺はちゃんと忠告したし、後で泣くのは兄貴なんだし。ただ……」

哀れむような物言いをそこで暫し途切れさせ、リハエルは身体の汗と汚れを拭う。そして、それを吸いこんだ手ぬぐいを、こちらに思いきり投げつけた。

「そのためにこき使われるのは御免だね！ 俺は兄貴の道具じゃねえんだ。急いでるんなら、ちゃんと初めからそう言えよ」

「あ……、ご、ごめん。ティアナの話をしたりしたら、気を悪くすると思っ  
てさ」

「ああ、当たってるぜ。けど、それでも我慢してやるよ。ヴェゼーラにこっぴどく叱られたからな」

「な、なんだよそれ？ お前、あいつにそんなこと……」

思わず上げた叫声に、リハエルはにやりと笑うのみだった。替えの衣服をそそくさ着こみ、さつさと扉に手をかける。

「素敵なことだと思う、とき。いつか紹介してくれて言ってたぜ」

そう言い残して彼女の元へと向かう姿を、サマエルは窓から呆然と見送った。エルモッドを父に持つ彼女は、この里の者にとってある意味特別な存在だった。この世界に暮らしていくうえでの精神的支柱、可能性の象徴とも言えるだろう。

明るい振る舞いの裏側で、ヴェゼーラが寂しがっているのは知っている。なにしろ、ここには同じ年頃の娘がいない。例のブレーム行きにもしもティアナが来てくれたなら、お互いにとってきつといい機会になるだろう。無論、彼女が心を開いてくれた、その先にある話なのだが。

——今日こそきつかけつかまなくつちやな。

急ぎ身支度を整えて、サマエルは軽やかな足取りを扉に向ける。そして暖かく穏やかな風とともに、深い森のなかへ駆けこんでいった。いつそう濃くなつた木々の緑も、足下で咲き誇る花々も、今日はのんびり眺めてなどいられない。雨が残したぬかるみにときおり足を取られつつ、ただひたすらに出口を目指す。やがて村へと到着すると、彼は門にもたれかかって乱れた呼吸を整えた。汗を拭きつつ見上げてみると、西の空がそろそろ赤くなりはじめている。散々急いではみたものの、仕事を終えてからではやはりこの時分が限界だろう。だが、目的を果たすためには、かえって都合がいいかもしれない。

家に来ればいつでも会えると、ルリアは場所を教えてくれた。だが、ああして拒絶されたまま、押しかけるのも気が引ける。まずはちゃんと話をし、こちらの本意を伝えてからだ。

探し回る必要など、おそらくないに違いない。丸めた手ぬぐいをしまい込み、彼はあの石垣に向けて歩きはじめた。

——ふうん。やっぱり、か。

はたして彼女はそこにいた。初めて見かけた時と同様に、きちんと行儀良く腰を下ろして。

さてさて、どうしたものだろう。その後ろ姿を見つめつつ、暫し思案を巡らせる。同じように話しかければ、同じ結果が待つのみだろう。何度か首を傾げた末に、彼は気配を消すことにした。

大きく回りこんで畑に上がり、そつと背後から忍びよる。都合のいいことに、こちらはちょうど風下側だ。多少の音や気配なら、察せられずにすむだろう。案の定、手で触れられるほどにまで迫っても、彼女の頭は動かなかつた。滑り落ちていく太陽を、静かに見つめるのみである。

——それ！

肩越しに回した掌で、彼女の視線をいきなり遮る。細い肩が激しく狼狽え、垂らされた髪が大きく揺れた。

「だ、だれなの？」

必死に逃げまどう視線の先に、目隠しを先回りさせていく。彼女が身体を捻ってくれば、同じ方向に自分も逃げる。奇妙な追いかけっこは暫くつづき、やがて唐突に終わりを告げた。

「俺だよ、俺」

空いた手で精いっぱい歪めた顔が、ティアナの瞳に映りこむ。

「あ……」

彼女はその眼を円くして、短く洩らしたただけだった。居心地の悪い沈黙が、暫しその場を支配する。

我ながら子どもじみたことをしたものだ、サマエルは今さらながら後悔していた。これでそっぽを向かれたら、下手な道化以下である。

顔の筋肉が硬直し、ごくりと大きく喉が鳴る。そんなみともない狼狽ぶりが、逆に良かったらしかった。ぽかんと開かれていた唇にやがて微かな、そして穏やかな笑みが広がっていく。それを軽く握った拳で覆い、ティアナはくすくすと肩を揺らした。

「ああ、びっくりしたあ。なあに？ いきなりどうしちゃったのよ？」

「いや、いつもと違った顔が見たくてさ。だけどなんだよ。ちゃんとそうやって笑えるんだな」

はっと息を呑む気配に合わせ、笑みがたちまち霧散する。耳まで真っ赤に染まった顔を、彼女はつんと背けてみせた。

「あ、当たり前でしょ？ おかしかったり楽しかったりしたら、笑うに決まってるじゃない」

「ふうん。じゃあ、ああやって泣いてたのにも、ちゃんと理由があるわけだよな？」

軽い調子でかまをかけると、眼下の腕がぴくりと震えた。静かに戻された彼女の瞳に、しかし怒りの色はない。そこにあっただのは、哀れなほどの気まずさだった。

「……知ってるくせに。お母さん言ってたもの。みんな話しちゃったって」「教えたくなきや、それでもいいさ。俺はただ……」

続けようとした言葉があまりに気恥ずかしく感じられ、思わずそこで口ごもる。だが、彼女の見事な先読み、無理の必要はなくなった。

「友達なんて欲しくない。私のことはほっといて」

「お、おい。ちよつと待つてくれ！」

石垣から飛び降りたティアナを、必死の想いで呼び止める。声を裏返してしまつたことが、自分のことながら情けなかつた。

「なら、話を聞いてくれるだけでいい。笑えるねたを、たくさん持つてくるからさ。な、それならいいだろ？」

「うるさいなあ」

ぼつりと洩らされた呟きを、しかめっ面が追いかけてくる。

「……そんなに言うなら勝手にすれば？」

こちらをじつと見据えた末に、ティアナは結局駆け去つていく。が、食いだる必要はなさそうだった。くるりと背を向ける直前に、彼女は確かに微笑んだから。その残像を心に焼きつけ、サマエルは夕暮れの村を後にした。

こうして石垣に腰を並べての、二人の交友がはじまつた。とはいうものの、返つてくるのは簡単な相づちと小さな頷きだけである。どこをどう見ても、会話とはいえない状況だった。しかし、迷惑げな表情を浮かべながらもティアナはこちらに視線を向けて、少なくともきちんとして聞いてはくれていた。

裕福だった家庭において、しっかりと躰を受けたのだろう。だが、それを当たり前にしてみせるのは、決して容易なことではないはずだ。

「け、怪我してるの？ 大丈夫？」

その日、腕を吊つた自分に向かって、ティアナはあたふた駆けよつてきた。

「別に大したことないよ。ちよつと、ざっくりいっただけ」

「ざっくりつて……。もしかして、痛い、の？」

「ん？ まだ、ちよつとね」

「ばか。無理して来なくたって構わないのに」

みるみる引ききってしまった彼女の血の気は、結局別れる時まで戻らなかった。そんな性格のティアナにとって、都での出来事がどれほど大きなものだったのか。それは容易に想像できる。

仕事や天候の邪魔が入らぬ限り、サマエルは毎日ゲルンヴェルツを訪れた。住む世界があまりに違っているために、手みやげの話題には事欠かなかった。森やヴェゼーラや、そして里の仲間たちのこと。毎日の仕事や生活のこと。森に住むたくさんの動物や鳥たちのこと。そうした話を聞かせてやっていくうちに、彼女の反応は少しづつ、しかし確実に変わっていった。相づちが多く、長くなり、やがて微笑みは声を出しての笑いになった。

この頃になると、里の仲間たちの間にもすっかりティアナの存在が浸透していた。おしゃべりのヴェゼーラが、なにかと話題にするせいだった。はた迷惑と思うより、感謝しなくてはならないだろう。皆の協力のおかげで時間をひねり出せた日が、数え切れぬほどあったのだから。

ガゼスに教わりながら作った革細工や、カヴァリラの手による木苺のジャムや、それにヴェゼーラからの伝言を、彼女は本当に嬉しそうに受け取ってくれた。そして、そんな贈り物達がさらに会話を弾ませた。

仲間たちはティアナのことを、概ね好意的に見てくれているようだった。生理的に人嫌いだというゲトラカントや弟、リハエルを除いてはだが。しかし、そんな彼らにとつてさえも、ティアナは無視できぬ存在になりつつあった。

ある日、狩りを担当するゲトラカントが、とんでもない物を持ってきた。

「おら。ティアナとかいうのにくれてやんな」

彼が木床に投げだしたのは、捕ったばかりの鹿の子だった。いくらなんでも、彼女にそれは差しだせない。そう丁重に断ったのだが、重たければらせばいいととんちんかんなことを言う。

「ばっかじゃねえの？ ティアナは女の子なんだぜ。そんな血生臭いもの見せられるかって、兄貴はそう言ってるんだよ」

延々と続いた押し問答にようやく終止符を打ったのは、自分ではなくリハエルだった。ヴェゼーラに影響されたか、はたまた慣れてしまったのか。最近では弟すらも、自然に彼女の名前を口にする。

いよいよ現実味を帯びてきたブレム行きに、実はティアナを誘おうと考えている。そうリハエルに打ち明けるまで、正直なところ散々迷った。だが、話を聞いた彼は決して喜びこそしなかったものの、否定もまたしなかった。

まるで天を駆けあがる朝日のように、ティアナは閉ざされたこの里へ光を投げかけてくれている。高く越えがたい心の壁は、未だ心にそびえたままだ。心を許せるのは相手が彼女であるからで、決して万人に対しての話ではない。そしてそんな彼女ですらも、こちらの秘密を知らぬまゐる。いつか打ち明けようと思いつつも、ついつい言いそびれたまま別れてしまう。ずっとその繰り返しだった。

「ねえ、サマエル？」

彼女が改まった口調で訊ねてきたのは春もそろそろ終わりに近づき、日の入りが極端に遅くなりはじめた頃だった。もう夕刻であるにも関わらず、窓からの陽光はかなりの強さを保っている。

初めて入った彼女の部屋は、なんとも殺風景な空間だった。鉢植えや織物などで飾られた、ヴェゼーラのそれとはあまりに違う。思い出が染みついた小物は、越してくる時にすべて捨ててしまったらしい。たった一つだけ、古ぼけた熊の縫いぐるみが机にのせられているのみだった。聞けば、十歳の誕生日に父から贈られたものだという。

「どうして、こんなによくしてくれるの？」

「え？ 別にいいだろ、そんなこと」

「全然よくない！ よくないよ」

寝台に腰かけた小さな身体が、ぐっとこちらに折り曲げられる。その栗色の瞳は、まさに真摯そのものだった。が、やがてそれは力を失い、足下にへなへなと落ちていく。

「だってサマエルだけでもん。私とこうして話してくれるの。だって、村のみんなには……」

消え入るように呟いて、彼女はうなだれた首を左右に振った。

「ううん、違うよね。自分で嫌いにさせちゃったんだ。友達になんかなりたくないって、もしもそんなこと言われたら、きつと私だって頭にくるもの。でも……。サマエルだけはそれでも、何度でも話しかけてきてくれて、こうして側にいてくれて。お願いだから教えてよ。あんなこと言った私なんかには、どうしてこんなに優しいの？」

「どうしてかなあ？ もしかすると、ティアナに似てるからかもしれないな」

「似てる？ サマエルが、私に？」

「ああ。俺も森のなかなんかで暮らしてるだろ？ 外との付き合いもほとんど」

ないしね」

「でも、仲間の人たちがいるじゃない。それに、嫌なんだったら森を出て、みんなと一緒に暮らせばいいでしょ？」

「できねえんだよ、そんなこと！」

つつい荒げてしまった声に、ティアナの肩がきゅつとすぼまる。彼女はそのまま黙りこくって、上目遣いにこちらを見つめた。

「あ……、わ、悪い」

「ううん、こっちこそ。やなこと言っちゃったみたいだね」

「気にすんなって。そうだな。うまく説明できないけど、俺たちにも俺たちなりの理由があつてさ。おいそれとは出ていけないんだ」

ティアナは考えこんでいた。首をかすかに傾けて、見えない答えを探していた。だが、やがて無理だと悟ったのか、ふうつと深く息をつく。

「もしもよければ、なんだけど。もっと詳しく教えてくれない？」

「よくない」

「どうしてえ？ 私のことをちゃんと知ってて、でも自分のことは秘密だなんて。ずるいよサマエル。そんなのずるい」

確かにそれが筋だろう。それに真実を打ち明けるための、これはいい機会かもしれない。

はたして受け入れてもらえるか、そして理解してもらえるか。正直なところ自信がなかった。が、いつか思い切ってしまうなれば、ここから先には進めまい。なによりも、真剣に向き合ってくれる彼女にすまない気がした。

「分かった。そんなに知りたいなら教えてやるよ。ただ、約束してほしいこと

が二つある」

「やくそく?」

「ああ。これは俺とティアナ、二人だけの秘密にしてくれ。絶対、人にばらしちゃ駄目だ」

当たり前だと言わんばかりに、彼女はこくこくと頷いた。

「それともう一つ。驚くなんて無理は言わない。けど、頼むから怖がらないでいて欲しいんだ。たとえ何が起こっても、俺はティアナのそばにいるから」

「むー。なんかよく分からないけど……。でも、うん。できる限りそうするつもり。それじゃ駄目、かな?」

「いいや、上出来だよ。よし、それじゃ行こうぜ」

「え? い、行こうって、どこへ?」

「いつもの場所さ。ここじゃちょっと狭すぎるんでね」

きよとんとする彼女を視線で促し、部屋の扉に手をかける。

「あんまり遠くまでいかないようにね。晩御飯までにはちゃんと帰ってくるんですよ」

そんなルリアの声を背に、粗末な平屋を後にする。粘りに粘っていた太陽も、そろそろ疲れてきたらしい。もくもくと連なる雲のなかに、間もなく姿を消そうとしていた。長く伸びた影に先導されて、ティアナの手を引き歩きます。

こんな手間をかけたたりせずに、言葉で説明すれば良かっただろうか。否、もしも「嘘でしょう?」と聞きなおされたら、結局うやむやにしてしまうに違いない。

「ちょっと、そこで待っててくれよ」

いつもの石垣に到着すると、サマエルは独り森へと向かった。

「あ、そうそう。さっきの約束、忘れるなよな」

ふと頭上を仰いでみると、橙色の階調が空一面に広がっている。地平線近くに漂う雲は刻一刻と形を変えて、まるで生きてでもいるかのようだ。

ティアナと一緒にあの場所で、何度空を見上げたことか。だが、今日の夕焼けはそのいずれより素晴らしい。

「よし、ここまで来れば大丈夫だろ」

石垣に佇むティアナの姿がやがて木々の向こうに消えたところで、彼の歩みはぴたりと止まった。周囲に視線を巡らせながら、まとったものを脱いでいく。上衣につづいて下衣を取り去り、最後に靴まで脱ぎ捨てて、彼は産まれたままの姿になった。それから、抜け殻となった衣服を結び、くぐり抜けられるほどの輪を作る。

「……ティアナが待つてる。ぐずぐずしてないで急がなくなっちゃな」

折った膝を大地につけて、祈るかのように上半身を丸く屈める。垂れた頭の一点に意識をすべて集めると、背骨の周囲がじんと熱くなってきた。それが次第に鈍い痛みへと変化していく。無意識のうちに低い呻き声が洩れ、そして肉体は急激な変貌を開始した。

彼がティアナの元へと戻ったのは、空の美しさがいよいよ盛りを迎えはじめた頃だった。まずは森の切れ目から顔だけ突きだし、つづいて全身を露にさせる。途端、ティアナの掠れた悲鳴が耳に届いた。

「ひ……………」

口を覆った彼女の姿が、石垣の上で後ずさる。全身ががたがたと揺れているのが、こちらからでもはつきり分かった。

約束が違うじゃないかと、怒るわけにはいかないだろう。自分がサマルエルということ自体、おそらく彼女には分かっている。

——そんなに怯えないで。お願いだから気がついてくれ。

後ろ脚で大地を蹴って、広げた翼で空気をつかむ。そのまま大きく羽ばたくと、まるですべるように景色が動いた。たちまち到達した石垣の直下に、できるだけ穏やかに舞い降りる。咄嗟にしてしまった行動だったが、それがかえってまづかった。

「あ……、ああ」

襲われるとでも思ったのだろう。彼女の顔からは、すっかり血の気が失せていた。踏んばられていた膝がぐりと折れて、尻餅をつくようにへたりこむ。

想いを言葉にできないことが、どうしようもなくもどかしい。だが、それを恨んでも仕方がなかった。とにかく、やれるだけのことをやるしかあるまい。

四肢をそつと降り曲げて、腹を大地にぺたんこつける。翼を限界まで折りたたみ、漆黒の毛並みに密着させる。揃えた前足に頭をのせて、彼は静かにティアナを見上げた。

「大人しい、のね？ あなた」

石垣から降りてくれはしたものの、彼女は未だ躊躇っているようだった。敢えて視線をそらせてやると、その存在感がようやく少しずつ、用心深く近づいてくる。

「ごめんね、怖がっちゃって。でも、あなただって悪いのよ。いきなり飛んで

きたりするんだもん。きつと餌にされちゃうんだって、すつごく怖かったんだから」

ティアナはおずおずと手を伸ばし、両耳の間を優しく撫でた。

「わあ、柔らかくって気持ちいいー」

毛並みをいじられるくすぐったさに、思わず小さく喉が鳴る。

「よく慣れてる……。そうか、サマエルが言ってたのって、きつとあなたのことなんだ。ね、ご主人様は？ サマエル、どこに行っちゃったのかな？」

首に柔らかく抱きつかれ、彼は大いに狼狽えた。身体がぶるっと震えたが、ティアナの身体は離れない。鋭さを増した嗅覚が、甘い香りで埋めつくされる。

「ひどいよね、そばにいてくれるって言ったのに。ねえ、あなたもそう……。耳をくすぐる囁きが、そこで突然ぶつりと切れた。彼女ははっと息を呑み、かけた首輪を引き寄せる。

「こ、これ、サマエルの服じゃない？ なんであなたが持つてるの？」

暫しさまよった栗色の瞳は、やがて曲げた前足に吸い寄せられた。そこには長い傷跡が、毛並みの禿げとなって残っている。先日、流れの盗賊たちとやり合った時、剣で斬り裂かれてしまったものだ。ゲルンヴェルツを脅かし、シエリルの命を奪った彼らは、もうこの世界のどこにもいない。

「もしかして」

指で傷跡をなぞったティアナが、上目遣いにこちらを見つめる。

「サマエルなの？ あなたが……。サマエルなの？」

小さく鳴いて応えると、彼女は二、三步、よろよろと後ずさった。

「うそ、でしょ？ ねえ、そうじゃないなら尻尾を振って」

言われた通りの仕草を返され、口を覆って立ちすくむ。

「じゃ、じゃあ羽を動かして、みて」

そつと送ってやった風が、束ねられた金髪をふわりと揺らした。彼女は石垣に背中を擦りつけ、そのままへなへなと座りこむ。

「サマエルなんだね？ 信じられないけど……、でも本当にそうなんだね？」

頷いてみせる代わりに、サマエルはふわりと身体を浮き上がらせた。暫し空中からティアナを見下ろし、その眼前に着地しなおす。低くした姿勢の意図を、彼女はすぐに察してくれた。

「もしかして乗れっていうの？ そうか、これって手綱の代わりなんだね」

その尻込みの表情は、間もなく微笑みに変わっていった。スカートをおもむろに結んだ腕が、つづいて背中にのせられる。苦戦しつつもよじ登ってきた彼女がやがて即席の手綱を握ったところで、サマエルは力強く羽ばたいた。空高く舞い上がった彼、大きな有翼の黒豹は滑るように上空を旋回し、そして何処かへと飛び去った。

夕暮れの大空を暫し遊覧してやってから、彼は大断層の頂上へとティアナを運んだ。背後に沈みゆく太陽が、眼下の大地を染めぬいている。大森林もゲルンヴェルツも遥かに望むブレエムの都も、そしてそれらを繋ぐウォーレル河の水面までもが、まるで燃えてでもいるようだった。

「きれいだなあ」

足下から吹き上がってくる風に、ティアナの金髪が夕陽を散らす。すぐ後ろで姿を戻していく自分を、彼女は岩に腰かけたまま、一度も振り返ろうとしな

かった。心遣いだと分かっているけど、心のどこかに気まずさが残る。それをどうにも抑えきれずに、サマエルは少し離れて腰を下ろした。

「あ、やっと終わったんだね」

ぱたぱたと駆けよってきた彼女が、そっと隣に肩を並べる。その微笑みに、澱みやためらいは微塵もなかった。

「いい眺めだろ？ 俺、ここが好きでさ。時々、こうやって気晴らしにきてるんだ」

「羨ましいなあ。こんなところへ、好きな時に来られるなんて」

「そうか？」

「うん。だって、私じゃ絶対に無理なもの。それに空からの眺めや夕焼けも、すつごく素敵だった。……ただ、寒くてちよつと辛かったけど」

肩をすぼめたティアナの口から、くすりと小さな笑いが洩れる。あの頃のことか信じられなくなるほどに、今の彼女は表情豊かだ。だが、ルリアに聞かされたところによると、それも自分という時だけらしい。他の者たちに対しては、相変わらずの調子だそうだ。

「怖くはなかった？」

「ちよつとだけ、かな。だって、ああして飛んだのなんて初めてだったし。あはっ、そんなの当たり前だよね」

「いや、そういう意味じゃなくなってきた。なんていうか、その……、俺のことが、だよ」

「サマエルを？ どうして？」

「妖魔だぜ、だって」

自分や里の面々は本来ならこの世界、アルドラウムにあらざるべき存在なのだ。ヴェゼーラの一家を除いては、召喚術によって呼びだされそのまま戻ることができなくなつたか、あるいは自らその道を絶つたかである。

同じような事情を持った同朋たちははるか以前からわずかに、しかし常にどこかにいたらしい。アルドラウムの住人たちは、いつしかそんな彼らを妖魔と名づけた。そしてそこに込められた憎悪と畏怖を、自分は肌で感じてきた。

「あなたが森から出てきた時ね、最初はすごく怖かった。でも、今は全然そんなことない。ほんとだよ」

柔らかく微笑んでみせたまま、彼女は囁みしめるように言葉を紡ぐ。

「妖魔だつてなんだって、サマエルはサマエルだもん。私の、大切な友達だもん」

「……ありがとうな」

そつともたれかかってくる肩に、躊躇いがちに手を回す。一瞬。びくりと身じろぎながらも、彼女はそれを拒まなかった。

「なんだか救われる気がするよ。この世界のやつらがみんなお前みたいだったなら、俺たちもこそこそしなくてすむんだろうに」

自分と弟を召喚したのは、各地の聖職者達を取りまとめている、ゼバス大神殿の一派だった。いったい何のためだったのか、それは未だに分からない。はつきりしているのは、研究材料にされたということだ。

拘束されて身体の隅々を調べられたり、皮膚を切りさかれて組織を採られる。飢えた猛獣と対峙させられたことや、発情した雌豹との性交を強要されたことすらあった。

そんなひどい扱いを、受け入れていたわけでは勿論ない。幾度もの逃亡機会をむざむざ見逃しつづけていたのは、切り札を握られていたからだ。異界から呼びだした者を再び送り返すことができるのは、その時の術者のみである。いくら召喚術が使えようとも、別の人物ではだめなのだ。それ故に、呼びだされた者たちは彼らに従わざるを得ない。

召喚者ケティが、夫と息子を人質にとられていたこと。苦悩の末に送還を画策し、そして命を奪われていたこと。そんな経緯を知ったのは、イグレットやガゼスに助けだされてからだった。

「ようするに、騙されてたってわけだよな。もうすぐ送り返してやるからってさ」

「大変、だったんだね」

肩に置いた掌を、彼女の指先がそっと掴んだ。寄せられた頬は柔らかく、そしてとても暖かい。

「私なんかよりずっと。ずっと大変だったんだ」

「なあ、ティアナ？ お前、他人が怖いのか？」

そう問いかけた途端、ティアナの髪が大きく揺れた。一瞬険しくなった視線はしかしすぐに力を失い、やがて足下へと伏せられる。

「怖いよ」

長い沈黙を挟んだ後に、彼女はぽつりと呟いた。うなだれた横顔が見やるゲルンヴェルツでは、家々の窓にそろそろ明かりが点きはじめている。

「自分でも分かっている。それじゃ駄目だって分かっているの。でも、私、もうあんな気持ちになりたくないよ」

心に刻まれてしまった傷は、未だ癒えてなどいないのだろう。なんとか歩きだそうとしてみても、痛みがその邪魔をする。

「気にすんな。そうなつちまうのも無理ないさ」

ここにやってきた頃は、自分もやはりそうだった。いつか帰還の方法が見つかる日まで、このアルドラウムに暮らすしかない。そんな逃げ場のない現実が、耐えるに耐えがたい責め苦しに思えた。

「俺も人が怖くてさ、それになにより憎んだ。でも、最近こうも思うんだよな。俺たちだってこの世界でやっていけるかもしれない。そういう場所やそういう奴らが、いつか見つかるかもしれないって」

「うん、見つけられるよ。サマエルなら、いつかきつと……」

「俺だけじゃない。きっと、ティアナだって同じだよ。だからさ、そうやって怖がってないで、一緒にもう一度やってみないか？」

「え？ で、でも、私は……」

「心配するなよ。もしもうまくいかなかったって、俺が話を聞いてやる。いつもお前のそばにいるって、約束ちゃんと守っただろう？」

ぽんと肩を叩いてやっても、惑いの表情はそのままだった。しかし、ぎこちなく持ち上げられた瞳がやがて、徐々に光を取り戻していく。

「あり、がとう。サマエルと知りあえて、わたし本当に良かったよ」

「ああ、俺だってそうさ。こう考えられるようになったのは、なによりティアナのおかげだもんな。お前とこんな風に話せるなんて、はじめは思ってたなかったけどね」

深く頷いた口元に、柔らかな笑みがすっと浮かんだ。それを掌で覆ってみせ

て、彼女は肩をくすくす揺らす。

「私もよ。本当のこと言うとね、最初は変な奴って思ってたんだ」

気がつけば、遙かな地平線から大きな満月が顔を覗かせている。その輝きが増していく様を、二人は身を寄せあつて眺めつづけた。そうしながら持ちかけたブレエム行きを誘いを彼女はいくらか躊躇いながら、それでもにこやかに受け入れてくれた。



次にゲルンヴェルツへ赴けたのは、三日も過ぎてからのことだった。あの日、赤く染まっていた雲塊が、しつこく雨を降らせたからだ。

ブレエムへの同行を、ティアナが承諾してくれた。そんな知らせに、ヴェゼーラは殊のほか喜んだ。引率者のガゼスは二つ返事で、弟も渋々ながら首を縦に振ってくれた。

あとはおおよその段取りを、ティアナに伝えるだけである。久しぶりの陽光を浴びてあの石垣に向かう、サマエルの足取りは軽やかだった。が、いつもの門を抜けたところで、突然それが激しく乱れる。

「あれ？」

傾きはじめて陽光のなかに、しかし彼女はいなかった。きよろきよろあたりを見回すも、それらしき姿はどこにも見えない。

「用事でもあつて遅れてるのかな？」

ひよっとしたら、さっそくできた友人と話しこんででもいるのだろうか？

軽い嫉妬を覚えつつ、いつもの場所に腰かける。たとえ、どんなに遅れても、おそらく来てはくれるだろう。だが、そんな確信をよそに、彼女はなかなか現れなかった。初夏とはいえども風が冷たい。既に陽は沈みかけ、星がちらほら見えはじめている。普段なら名残惜しさを感じつつ、帰宅を意識する頃合だろう。独り寂しく待っているのも、そろそろこのあたりが限界だった。

「まさか風邪でもひいちゃったか」

さんざん寒風にあたらせたから、その可能性は高いだろう。配慮が足りなかったと後悔しつつ、家に赴くことにする。だが、落ちついていられたのはそこまでだった。歩みが知らず早くなり、ほどなく駆け足へ変わっていった。

——な、なんだよ。いったいどうしちまったんだ？

静まり返った空気が重い。畑にも通りにも井戸端にも、暮れゆくゲルンヴェルトには人の気配がまったくなかった。家々の窓はみな鎧板に覆われ、扉も堅く閉ざされている。その向こうに人がいるのか、それともやはりいないのか、確かめようという気は起こらなかった。とにかく彼女の顔を見て、嫌な胸騒ぎを収まらせない。

「ティアナ！」

息せききって家に駆けこみ、声を張りあげて名を叫ぶ。だが、彼女からもリアからも、応えは一向に返ってこない。

「ティアナ？ いないのか、ティアナ？」

奥の寝室を覗いてみても、やはり彼女の姿はなかった。倒れた熊の縫いぐるみが、静かに見つめるのみである。つい先ほどまで主が横たわっていたように、寝台の毛布はめくれたままだ。が、咄嗟に触れてみた指先に、温もりは伝わっ

てこなかった。

「くそっ！」

夕闇の通りに飛びだして、まっすぐ隣の民家へ向かう。

「いるんだったら開けてくれ！ 聞きたいことがあるんだよ！」

だが、いくら拳を叩きつけても、扉が動く気配は見えない。業を煮やして取っ手を握るも、どうやら門がされているようだった。それはすなわち、向こうに人がいるということだろう。

——居留守、かよ？

やはり何かがあつたに違いない。通りを走り抜けながら、狼狽する頭で考える。もしや、また盗賊に襲われでもしたのだろうか？ いや、それにしても様子がおかしい。どの家にも荒らされた様子はないし、しつかり戸締まりがされている。

そう、村人たちは確かにいるのだ。にも関わらず、応えがないのはどういうわけか？

どうにもわけが分からぬままに、次から次へと扉を叩く。だが、やがて村の中心部に入ったところで、そうする必要はなくなった。大木を囲んだ広場の前に、暫し呆然と立ちすくむ。

「うそ、だろ……。どうしてこんな——」

それきり言葉が出なかった。

全裸に剥かれた二人の女性が、枝から首を吊られている。いつも紅茶を振る舞ってくれるあの老婆と、そして見紛うことかルリアであった。

頭を力なく垂れたまま、彼女はぴくりとも動かない。末期の苦悶が顔に焼き

つき、白く細い脚を漏れだした汚物が染めている。そしてそれが滴るすぐ横で、ティアナが幹に縛られていた。猿ぐつわをされ、力なくうなだれた彼女の頭が、こちらにむかつてかすかに振られる。

——生きてる！

そう意識するより先に、足が大地を蹴っていた。怒りや疑問は覚えなかった。一刻も早く彼女の戒めを解いてやりたい。頭にあるのはそれだけだった。

「ティアナ！」

「は、はふうっ！ あむむううっ！」

締めつけられた身体を仰げぞらせ、自由にならぬ口で彼女が叫ぶ。裸身を見るのは可哀想だが、今は気に止めてなどいられない。すぐさま縄を解いてやり、幹越しに脱いだ上衣を差しだしてやる。だが、それを受け取ろうともせず、彼女はこちらに抱きついてきた。

「お、おい、とにかく服を——」

情けなく上擦った呼びかけを、しかし彼女は意に介さない。頬を胸に押しあてて、思わぬことを口走る。

「逃げて、サマエル！」

「どうしたんだよ？ いったい何があったんだ？」

「あの日、誰かに見られてた。私たちが飛ぶところ見られてたのよ」

「なんだって？ そ、それじゃあ」

ティアナが頷くより早く、四方の家の扉が開いた。けたたましい足音を響かせて、大勢の人影が広場を囲む。金で雇われた傭兵か、もしくは軍の兵士だろうか。剣や弓で武装したその見慣れぬ顔ぶれが、すべての疑問に答えをくれた。

「……そういうことか。俺、あんた達ならって、ずっとそう思ってたのに」  
落胆の呟きにまるで応えでもするかの如く、窓の向こうでいくつもの詰りが上がる。

「今までよくも騙してくれたな！ くだばりやがれ、化け物め！」

「こっちの好意につけこんで、さんざん村を荒らしやがって」

「返して！ 私のシェリルを返してよ」

「ち、違うっ！ そうじゃないんだ」

どうせ無駄だろうとは思っていた。が、それでも叫ばずにはいられなかった。むずがるのを叱られた子どものように、彼らはしんと静まりかえる。

虚しかった。彼らの態度がではない。すべては幻想だったのだと、思い知ったことがある。それは幸せな夢からの目覚めに味わう、はかない気分にどこか似ていた。

「化け物は……、化け物はある方でしょうか？」

ぼんやりと霞む頭に、そんな涙声が響いてくる。焦点を取り戻した視線の先で、彼女は渡した上衣を抱きしめていた。周囲の民家をぐるりと睨めつけ、痣だらけの身体を震わせる。

「平気な顔して叩いたくせに！ 平気でお母さんを殺したくせに！ サマエルはそんなことしないって、そう言っただけじゃない。本当のこと言っただけじゃない。なのに……、なのに！」

そこから先は、言葉になっていなかった。がっくりと泣き崩れる彼女の向こうで、剣が一斉に抜き放たれる。途端、無意識のうちに身体が動いた。

「ティアナ！」

駆けよった身体に覆い被さり、そのまま変身を開始する。胸の下で嗚咽を洩らす、彼女をなんとか守りたい。心にあふれたそんな望みが、やがて激しい咆哮となつて響きわたった。



「い、ててて……」

生温い液体が腕を伝つて、指の先からぼたぼた落ちる。足と背からの出血も、やはり止まつてくれないようだ。寄りそつたティアナの肩を借り、暗い草原をひたすら進む。今のところ、追手の姿はどこにも見えない。なんとかゲルンヴェルツを迂回して、森に入ることができそうだった。

「……ばかだよ、サマエル。私をかばって怪我するなんて」

「お、おい！ だから、こっち向くなつて」

わざわざ咎めるまでもなく、ティアナは狼狽も露に視線を戻す。それも無理はないだろう。上衣は彼女が着ているし、下衣は姿を変える時にちぎれてしまった。月明かりに照らされた横顔が、みるみるうちに紅潮していく。

「だ、大丈夫だよ。暗くてあんまり見えてないから」

戯けた口調の釈明が、なんとも言えず愛らしい。

無論、作られた明るさだろう。ルリアがあんなことになったのも、村に住めなくなったのも、すべて自分が原因だ。妖魔と関わってしまったことで、彼女らは壁のこちらに放りこまれた。

「最後に泣くのは兄貴だ」と、あの日リハエルは言っていた。勿論、それは

覚悟していた。ここまで親しくなれるとは、正直思っていなかったから。だが、そうなったのは自分ではなく、相手のティアナの方だった。

「ごめんな、ティアナ」

詫びて済むことではないだろう。だが、他にどうすればいいのか分からなかった。

「またあ？ サマエルのせいじゃないよって、何度同じこと言わせる気なの」  
ひどく引きつってはいたものの、彼女は直ぐさま笑みを浮かべてくれた。しかし本当にそうなのだろうか。正体を明かしたりしなければ、いや、それ以前に自分と知り合ったりしなければ、こんな目に遭わずに済んだだろうに。

「サマエル？ あなたが考えてること、私にも大体わかるよ」

蒼い月を静かに見上げ、彼女は穏やかに言葉を繋いだ。

「でもね、きつとそれ違ってる。あなたと知り合えたこと、私ぜんぜん後悔してない。だって、色々なこと教わったもの。たくさん笑わせてくれたもの。だから、安心して暮らせるところ、二人でもう一度探してみようよ」

こちらを向いた微笑みが、またもあたふたと振り戻される。眼が潤んでしまったことを、おかげで気づかれずに済んだだろう。柔らかな光に照らされた、大森林はもうすぐそこだ。

「ね？ そうしよう？」

お互いを隔てる心の壁は、あまりに高く厚かった。だが、希望が色褪せてしまったなかで、ティアナは変わらずここにいる。自分の知っている彼女のままで、光を投げかけてくれている。腕に感じる温もりは、幻などでは決してない。

そう。人々を許せそうに感じたことも、この世界でやっていけると感じたこ

とも、きつと錯覚などではなかったはずだ。そしてティアナが近くにいる限り、あの時の想いは決して死なない。

「それ、俺の言ったことそのままじゃんか。だけど、そうだな。ティアナさえ良ければ、二人で一緒にやってみようか？」

「……うん」

はにかみつつの頷きに、どれほど救われたことだろう。だが、感謝を言葉にするより早く、殺気だったざわめきが耳に届いた。

「あっちだ！ 血の跡はあっちに行ってる！」

「まだそんなに固まってないぞ。油断すんなよ！」

——！

慌てて振り向いたその先で、たくさんのお火が揺れている。それらの主が何者で、どんな目的を持っているのか。それは考えずとも明白だった。

「た、たいへん！ 急ごう、サマエル」

「ああ。そうだな」

頷き返しはしたものの、おそらく逃げきれなどしないだろう。未だ出血は衰えず、歩くことすらもはや苦しい。そして、追いつかれてしまったら、なぶり殺しを待っただけだ。この状態では飛ぶのはおろか、まともに変身すらできるかどうか。

「月が出てて良かったよ。これなら、お前の眼でも見通しきくよな？」

澄んだ夜空を見上げつつ、肩から腕を引きもどす。そのまま押し離してやった背中では、数歩進んで静かに止まった。

「なに？ なに、言ってるの？」

振り向かぬままのその声が、細かな震えを伴っている。優しく賢明な彼女の  
ことだ。説明してやるまでもなく、分かっているに違いない。

「走るんだ。この先に森に入る道がある」

「で、でも、その足じゃ……」

「俺は残る。残ってあいつらの相手をするよ」

「いやっ！ そんなの嫌だよ」

もはや姿などお構いなしに、抱きついてきた彼女が首を振る。

「私も残る！ サマエル一人にしておけないよ」

「いいから行くんだ！」

押しつけられた彼女の頬から、熱い感触がいくつも流れた。ぎゅっと抱きし  
めてやりながら、その耳元でそっと囁く。

「ティアナは俺の宝物だよ。この世界でやつと見つけた、たった一つしかない、  
ね。だから、どうしてもあいつらには渡したくない」

もはや、彼女を救うにはこれしかなかった。囹の意味がなくなった以上、も  
しも捕らえられたなら結果は目に見えている。

「森に入ったらあいつの、リハエルの名前を呼びつづけるんだ。すぐには無理  
かもしれないけどさ、来てくれるまで諦めるなよ」

帰ってこない自分のことを、弟は探しはじめているだろう。さまよい歩く彼  
女の声に、気づいてくれればいいのだが。

「いや……。いやだよサマエル。ずっとそばにいてくれるって、あの時約束し  
たじゃない」

「大丈夫。俺がいなくなったらリハエルが、いや、ヴェゼーラやカヴァリラだっ

て、きつと力になつてくれるさ。頼むよ、ティアナ。いい子だから、な？」

語尾に精いっぱい力をこめて、彼女の身体を突き離す。

「行くんだ！ 行けったら行け！」

睨みつけたその先で彼女はぽろぽろ泣きながら、それでもようやくのことです腫を返した。そして、何度も振り返りつつ、闇のなかへと駆けていく。

虚しさは、いつの間にやら消えていた。ルリアが都を追われた時も、こんな気持ちだったのだろうか。ならば彼女がそうしたわけも、今なら分かつてやる気がする。

「ごめんな、約束守つてやれなくて」

ティアナに掌を振つてやり、足を引きずるように身体を回す。と、膝の力がいきなり抜けた。頭が重く、視界が青い。どうやら、立ち上がるのは無理そうだった。

追手のざわめきはいよいよ高まり、いくつかの篝火がすぐそこにまで迫りつつある。そしてその揺らめく光が、やがて穏やかな微笑みを闇に浮かべた。

了

着 稿 一九九九年 八月八日

第一版 一九九九年 十一月二十九日

第二版 一九九九年 十二月四日